

闇に挑んだ記者たち

中

―八〇年代朝日の統一教会報道―

ノンフィクション作家 三山 喬

「いまから三十五年前の一九八七年、私は一水会に依頼されて高田馬場のホテルの一室で統一教会・国際勝共連合批判を語りました」

十月十二日午後七時過ぎ、東京・新宿駅近くの会議室に集まった数十人の聴衆は、前参議院議員のジャーナリスト・有田芳生氏の回想に静かに耳を傾けた。

旧統一教会（世界平和統一家庭連合）をめぐる今回の問題で劇的に知名度を上げたのは、過去約二十年、大手メディアがほとんど教団の動きを報じようとしないなか、孤軍奮闘、これを監視し続けたフリー記者・鈴木エイト氏だが、この鈴木氏をさらに上回る長期間、有田氏が積み上げた教団取材の蓄積も改めて注目を集めている。

ふたたび開始された批判キャンペーン

この日の集まりは、新右翼系の団体一水会による「一水会フォーラム」という勉強会。有田氏は三十五年前、初めて人前で統一教会の危うさを訴えたまさに同じ集まりに、再び講師として招かれたのである。

当時の有田氏は三十代半ば。『朝日ジャーナル』の編集部に入入りしてまだ間もない駆け出しのフリー記者だった。

「最初は（新右翼団体の）一水会に呼ばれたということ、『えっ』とびっくりしたのですけれど、朝日ジャーナルでは（自分がこの問題にかかわる前）一九八五年にも

統一教会批判をやりまして、そのとき（一水会代表だった）鈴木邦男さんが『統一教会の関連組織』国際勝共連合は「反共」をうたっているもの、民族派にとつても敵である」と堂々と書かれて大反響を呼んだのです。私と呼ばれたのは、そういった経緯があつてのことでした」

彼の言う「八五年の教団批判」とは、前号で紹介した白井敏男氏のキャンペーンのことだ。正確には八四〇八六年。一連の報道はそこであったん完結し、白井氏は『朝日新聞』の東京本社社会部へと異動した。

編集部ではしかし、その後も新たな担当者がさらなる教団追及に着手した。「朝日ジャーナル編集委員」という肩書を持つ伊藤正孝氏が、新聞の社会部から来て間もない藤森研記者と再びキャンペーンを始めたのだ。

その第一弾の記事は八六年十二月に誌面化され、翌年春、第六弾の「中間報告」の回を節目として伊藤氏が筑紫哲也氏に代わる新編集長に昇格、それ以後は藤森氏ともうひとりフリー記者の有田氏がタッグを組み、八七年九月、第十弾までキャンペーンを続けた。

一九九〇年に出た有田氏の著作『原理運動と若者た

ち』のあとがきには、当時の氏の立場が説明されている。

（八六年に出版社勤めを辞め、フリーになつてはみたものの）取材し、それを文字にして生きていける自信などまったくなかった。何人もの友人たちが励ましてくれ、仕事を紹介してくれた。（略）

こうした出会いの一つが、八六年当時『朝日ジャーナル』で編集委員をしていた伊藤正孝さんからの依頼だった。伊藤さんが追及していた国鉄用地払下げ問題で取材しデータをまとめよというのが与えられた仕事だった。（略）

（これを機にときどき『朝日ジャーナル』に記事を書くようになり、その翌年）藤森さんを補佐して私も統一教会を取材することになった。（略）

取材結果の料理の仕方を、伊藤さんや藤森さんは適切にアドバイスしてくれた。取材のポイント、文章のまとめ方、なによりも取材の姿勢については伊藤さん、藤森さん、それに白井さんたちから皮膚感覚で学んだつもりだ。

みやま・たかし●1961年神奈川県生まれ。著書に『国権と島と涙～沖縄の抗う民意を探る』（朝日新聞出版）、『還流する魂（マブイ）世界のウチナーンチュ120年の物語』（岩波書店）など。